

---

# おばかなアタシと年上カレシ 2

神田春希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おばかなアタシと年上カレシ

### 【Zコード】

Z5103P

### 【作者名】

神田春希

### 【あらすじ】

アタシにはちょっと意地悪な年上のカレシ アツム がいる。大好きなアツムに手料理を食べさせてあげたいと思ってるんだけど、アタシはものすごいーーーく『超』がつくくらいの料理下手……。料理部に入つて腕を上げようがんばってるんだけど、なんだか最近アツムとすれ違つてばかり。アツムはアタシの事、どう思つてるの？

## 1・料理部にいりうー

その日アタシはかなり強引にチアキを誘つた。

「ちょっと咲。 あんた本気なの？」

「本気も本気！ ちょー本気だよ！！」

アタシはチアキに向かつてガツツポーズをする。

「あんたの本気は、まあ～分かつたけど、

なんで今まで料理部に入らないといけないの？」

チアキは面倒くさそうに手をひらひらとさせながら言った。

「だつて～

途中から部活に入るのって、結構勇氣いるじゃん？

一人じやこころぼそいのよお～。お願ひ！」

アタシはチアキの手をぎゅっと両手で握つて、軽く上田遣いで見る。

「この技は、実は男子だけじゃなくて女子にも結構効く。  
アタシの必殺ポーズなのだ。

……ただ一人、アタシのカレシには効かないんだけどね。

「あー、分かつた分かつた。

分かつたから、手をはなしなさい」

「え？ 入つてくれるの？？」

「そう。入つてあげる。

帰宅部よりも、なにか部活に入つていたほうが内申点もいいだろ？  
しね」

やれやれ、といった感じで肩をすくめながらチアキは言った。

「ありがと！ チアキ！」

「これでアタシ、いい奥さんになれるよー。」

アタシは喜びのあまりチアキに抱きついた。

そんなアタシをチアキは冷静に対処する。

「こらこら。

料理部に入ったからって、すぐに上達するわけないでしょ？  
目玉焼きもろくに作れない人なんだから」

そう、アタシは全然料理が出来ない。

目玉焼きの作り方はなんとなくわかっているつもりなんだけど、  
まず第一に卵がうまく割れない。

これは致命的だ。

なぜかどう頑張つても、卵の黄身がぐしゃつとつぶれてしまつ。  
それと同時に卵の殻が中に入る。

卵の殻を取るのに悪戦苦闘。

そのあと、油を敷いて卵を入れて、ふたをして焼く。  
アタシは半熟が好きなので、頃合を見計らつてふたを開けると……  
見るも無残なこげこげのぐしゃぐしゃ目玉焼きの出来上がり。

なにがだめなのか、さっぱり分からぬ。

でもアタシは大好きなアツムに、アタシの手料理を食べさせたい  
のだ。

『咲、料理上手なんだね。

こんなにおいしいんだつたら毎日でも食べたいよ』  
なーんて言われたい！

勝手な妄想をして、おもわず顔がにやける。

「咲、またあんた変な妄想してんでしょ」

チアキが呆れ顔で言ってくるけど、そんなの構いなしだ。

「だつて、やっぱり男の人人がぐつと来るのつて、

料理上手な女の子だつて聞いたし！

料理が上手になつたら、きっとアツムも、アタシのこと  
惚れ直すと思うし！」

嗚呼！ 早く料理上手になりたい！！

いい奥さんだねなんて言われたい！！！

放課後、アタシは少し呆れ顔のチアキと一緒に料理部の部室に行  
くことにした。

## 2・入部希望します！

「お邪魔します～」

アタシはそうこうと、料理部の部室に入る。

料理部は、その名の通り料理をする部活だ。

部室は「調理室」で放課後この部屋の前を通りながらやらいこにおこがしてくれる。

でも、この日は向かいこにおこはしていなかつた。

あれ？

しんと静まり返つた調理室こは誰もいない。

「今日部活休みなの？ 誰もいないんだけど」  
アタシが思つたことをチアキが的確に言つ。

「そう……なのかな？」

アタシはがつかりした。

だつて料理上手になるための第一歩がすでにくなつてしまつた  
のだから。

「ええ～！ そんなの困るよ～」

アタシの料理上手の道は？？

素敵な奥さんになる野望はどうすればいいの？～」

とりあえずアタシはチアキに文句を言つた。

「そんなこと、私にいわれてもねえ。

とりあえず、今日は出直そづよ」

チアキはヤル気なく咳く。

するとそのとき後ろから声を掛けられた。

「ん？ もしかして入部希望者か？」

聞き覚えのある声にアタシとチアキは後ろを振り向いた。

そこにはアタシたちの担任の先生、佐藤先生が笑顔を振りまいていた。

「佐藤先生？」

「お、なんだお前たちか。

どうした？ もしかして入部希望とか？

うちの部は今二年しかいないから、お前たちみたいな若者が入つてくれると

かなり助かるなあ」

佐藤センターは右手で「こ」を触りながら、私たちを見る。

「部活って……センターはどこの部なんでしたつけ？」

アタシが質問すると、佐藤センターはちょっとオーバーアクション気味に

肩を落としながら言った。

「ホームルームの時とか、結構言ってたんだけどな。  
上の空だったのか？

全く仕方のないやつだなあ。

先生は料理部の顧問だつて何度も言つただろ？」

「そ、そうだつたんですか。

すみません聞いてませんでした」

アタシはちょっと悪かったな、と思つてぺこりと頭を下げた。

「そんなことより先生。

私たち、料理部に入部希望なんです。  
特に咲。

この子の料理下手を、料理上手にして欲しいんですよ

少し意地悪に、チアキは言った。

「なに？！」

本当に入部希望だつたんだな！！

先生は満面の笑みを浮かべて、アタシたちを見る。

その先生少年のような笑顔に、アタシは少しうきつとした。  
べ、別に浮気とか、そんなんじゃないんだだけじね。  
アタシはアツム一筋だし！

だいたい、女子高では、男の子いないので、  
ちょっと歳が若くて、背丈が高ければ普通の顔であつてもキャーキ  
ヤー言われる存在になる。

佐藤先生も例外ではなく、他の生徒からきやーきやー言われてい  
る。

まあ、センセーって普通に見てもルックスは結構上。  
アタシから言わせるとかっこいいってよりは『かわいい』の部類  
に入ると思う。

背は高いけど童顔で、笑うと結構あどけない少年のような顔にな  
るので、

生徒は「そこがすてきー」とか「守つてあげたくなる」とか（  
本人は知らないだろうが）色々言われてくる。

それが今、ちょっと分かつた気がする。

近くで先生の笑顔を見ると、その、なんていうか、「守つてあげた  
くなる」と言う気持ちも分からなくなるにいつて言うか……。

いやいや！

アタシはアツムのかわいいー彼女さんなのだ！  
べつの男になんかドキッとなんてしちゃいけないんだってば！

### 3・アタシのレベルは・・・

「じゃあ、これで二人は正式に料理部の一員だ！おめでとう！」

なにがめでたいのかは分からぬけど、入部届けを書いたアタシたちに、

センセーは人懐っこい笑顔を振りまく。

だ・か・ら！ その笑顔は毒なんだつてば～！

「そういえば、今日は部活休みなんですか？」

チアキがまじめな顔で先生に質問をする。

そういえばそうだ。

なんで今日は部活やつてないんだろ？

「うちの部は三年しかいないんだよ。

だから、三年生が修学旅行に行つてしまえば先生しか残らないだろ？  
先生だけ居ても部活にならないから、休みにしてたんだけど、

お前たちが入つたから、明日からでもがんばるか！  
放課後、エプロンと三角巾を持って部室にきなさい。

先生がレクチャーしてやるからな」

先生は何かうきうきしながら、話をした。

そういえば修学旅行は今日から一週間の予定だつたな。  
場所は確か 京都。定番といえば定番だよね。

「明日からつて……なにを作るんですか？

私はほどほど料理できるけど、咲は田玉焼きも作れないんですよ？

」

げ。

そこは言わなくていいことなんじゃない??  
アタシは恥ずかしさのあまり、少し俯いた。

「そうなのか?」

センセーはあごを右手で触り、何かを考えている。

「よし! 分かった!」

そう言つと、アタシに青いエプロンと三角巾を手渡した。

「え?? なんですか??」

「井上がどんな田玉焼きを作るのか、ちょっと興味あるな。

レベルも知りたいし、今から作つてみろ」

センセーは爽やかに笑つている。

つてか、この感じ……なんか似たようなこと最近あつたと思つんですけど??

嫌、とは言えないこの状況。

アタシは仕方なく手渡されたエプロンと三角巾を身に付ける。

それにしても、なんかこのエプロンちょっと大きいな。

「先生、このエプロンつてもしかして……?」

「ああ、俺のエプロンだけ?」

チアキの質問にセンセーは「ともなげに答える。

ちょっとまで。

なんかアタシ恥ずかしいんですけど?

「咲、そのエプロン先生のだって」

チアキはアタシにわざと言つた。

聞こえてたから、知つてるつてつ!

わざわざもう一度言つてないの?!

ー

アタシは少し顔が赤くなつた気がした。

いやいや。

それは氣のせいだ。

もし氣のせいじゃなかつたら、それはその、  
今から苦手な料理を一人に披露しなければならないからに違ひない。

うん。きつとねうだ。

アタシは自分にそう言い聞かせた。

けして、センセーを意識してゐんじゃーないんだから。ね？

そして、アタシは田玉焼きを作つた。  
いや、作りうとした。

結果は、實に散々なもので、チアキは涙を流しながら  
おなかを抱えて笑い転げている。

センセーはとこつと、アタシの肩をぽんと叩いて一言。  
「よし！ 明田から特訓だ！」 だそつぐ……。

アタシは明田のことと思つた、思つて呑取りで家に帰つたのだった。

#### 4・明日の準備

「はあああああ～～～」

アタシは何度目かのため息をついた。

何度も考へても恥ずかしい！

ありえない！

最悪！

おなかを抱えて笑つてゐるチアキは、まあ、置いておいて。  
センセーのあの、かわいそうになつて感じの田一！  
その後の、「明日は特訓」とかつて言つセリフ！  
まるで、スポコンみたいじゃないですかーーー！  
大体、特訓つて何やるの？  
また玉子焼き（もじき）でも作りされるの？？

う～ん。憂鬱<sup>ううつ</sup>だ……。

そんな気分のまま、アタシは制服をベッドに脱ぎ捨て、  
長めのTシャツにレギンスとつらつな格好に着替え、下に下りていぐ。

「ねえ、おかーさん。

アタシのエプロンつてどこだっけ？」

台所で忙しそうに夕食の準備をするおかーさんに声を掛けた。

「え？ 咲のエプロン？

……あつたっけ？」

おかーさんは振り向きもせず、おなべの火を弱火にする。  
この匂い……。今日は煮物だな。

「エプロン、なかつたつけ？」

「あんた料理全くしないからねえ。」

あ、確かに美季がエプロン持つてたわよ。

それを借りたら？

それにしても、どういう風の吹き回し？

咲が料理でもするの？ あ、もしかして

「ガツコウ」使うの。

じゃあアタシ美季に聞いてくるよ」

アタシはおかーやんの話をあわてて遮った。

なんかいろいろなことまで、根掘り葉掘り聞かれそう！

危ない、危ない。

アタシは階段を上がって、自分の部屋の隣にある美季の部屋のドアをノックした。

あ、ちなみに美季つてのはアタシの妹。

ちょっと生意気な13歳の中学生なのだ。

「美季居る？」

「なに？ 居るけど。勉強してるから邪魔しないでくれない？」

ほらきた。ドア越しに聞こえるのは不機嫌そうな返事。

生意気娘め！ かわいくない！

アタシは美季の話を無視して勝手に部屋の中に入る。

「ちょっと！ まだ良いつて言つてないでしょ？」

勝手に中に入つてこないでよね」

美季はシャープペン片手に文句を言つ。

ほんと生意気だ！」

ちよつと前までは『お姉ちやん。おねーちやん』ってアタシにくつついてきたのにい！

「……エプロン明日使うんだけど、美季の使わないエプロン貸してよ。

おかーさんが美季に借りろって言つてたし

「えー。お母さんがそう言つたの？」

……仕方ないなあ。

ちよつと貸すだけだからね？ 汚くしないでよ？

美季はぶつづき文句を言つながら、アタシにエプロンを貸してくれたけど、

エプロンはそもそも服を汚れから防ぐのが目的なので、汚くしないでと言われてもちよつと困る。

ん？

「ねえ美季。

これ以外のエプロンつてないのかな？」

「ない。

あと、私は勉強中の。

出て行つてよね」

そういうアタシに向ふりと背を向けて、勉強を再開した。

仕方なくそのエプロンを借りて、部屋に戻つてきたもの……。

「なんつーか。少女趣味？」

アタシは美季から借りたエプロンをまじまじと眺める。

全体はピンクのチェック。

そしてフリフリに白いレースのオーバーレード。

ありえない

こんな恥ずかしいエプロンをして、佐藤センセーと特訓？！

か、かなりありえないんですけど…！

## 放課後、メロメロ談義

「咲、エプロン持つてきた？」

待ちに待つてない放課後がやってきた。

あんなに乗り気でなかつたチアキがノリノリなのは意外だけど、アタシは特訓ということと、エプロンのことでかなり気が重い。

「持つてきただけだわあ。」

妹のやつ借りたら、すつしに少女趣味で、恥ずかしいよ」

あの後、あまりにも恥ずかしいので、おかーさんに「アタシのエプロン買つて！」と頼んでみたものの、

「美季に借りたんだからいいでしょ？」と相手にされず……。ならばエプロンを買つてくるしかないと思つたら、近所のスーパーは「店内大幅改装のためお休み」だそうで……。

アタシは仕方なくあの、フリフリ少女趣味の恥ずかしいエプロンを持つてくる羽目になつたのだ。

……今田の帰つにちやんとした「恥ずかしくないエプロン」を買つんだからね。

「どんなエプロンなの？」

チアキはアタシのエプロンをひつたぐるよひこしてみる。

「かわいいエプロンじゃない」

へ？

チアキならげらげら笑い出すだらけ思つていたのに、  
意外な反応にびっくりした。

「咲の妹中学生だもんねー。

調理実習とかのときこれ着たら、男子なんてもうメロメロじやん?  
最近見てないけど、美季ちゃんかわいいし」

あ、美季のことね。

確かに美季はかわいい。

いや、正確にはかわいかつた、だ。

今は顔はまだ一応かわいいけど、性格ブスで最悪ですよ? チア  
キ殿。

「でも、そのエプロン。アタシが着るんですけど?」

「あ そつか。

……咲が着ても、かわいいと思つよ?

男子もメロメロに ここ女子高だからそれはないか

にやつと呟み笑いするチアキ。

するとアタシの耳元でそつとこいつ呟いた。

「佐藤先生がメロメロになるかもよ?」

「どうする? アシムさん、焼いちゃうんじゃない? ?」

「なつ、なに言つてんのよ!」

「そ、そんなことより、今日の帰り買い物付き合つてよ。  
ふつーのエプロン買いに行くから!」

もう！ チアキの馬鹿！

そんなこと言つから、アツムの声、聴きたくなつちやつたじ  
やん。

最近はお仕事が忙しいみたいで、全然会つてない。  
この前メールが来たけど、まだぜつか遠いところに行つてゐるから  
電波届かないし……。

アタシがちよつと暗い顔をしたからか、チアキはちよつとバツが  
悪そうに  
「そろそろ先生がくるから準備しこへ」と言つてエプロンを付  
け始めた。

アタシもそれに習つて、妹のエプロンをつける。

今日はアツムから、メール、届くかな？

## 6・センセーが調理室に入ってきた。

じぱりへして、佐藤センセーが調理室に入ってきた。

「お、ちやんと身支度できるな、関心関心。  
すぐ部活始めるから、手をちやんと洗つておけ」

そういうとセンセーも身支度を始めた。

昨日のHプロンとは違う、モスグリーンのやつだ。  
三角巾は白で、昨日との違いがイマイチわかんないけど。

アタシとチアキは石鹼で丁寧に手を洗い始めた。

食べ物を扱うときはさすがに手を洗いましょう。ところのまよく  
聞くけど、

実際のトコロ、面倒くさくな。なんて思つてた。  
だって火を通したらなんでもおんなじジャン? ?

でも、センセーは『食べる人のことを考えてさすがに手を洗うん  
だぞ』と昨日言つてたつ。

アタシの料理を食べる人

アタシの場合、やっぱアソムだよね~。

アタシは手を洗いながら、ちょっとニヤニヤとしてしま~。

早く料理上手になれるようがんばるね~!~!

「よし、準備できたな。今日はお菓子を作るぞ。

みんなの大好きクッキーだ」

センセーはそう言つと、クッキーの作り方を黒板に書き始める。

たぶん、アタシに分かりやすくなるためだと思つただけど、卵の割り方まで書いてあるのがちょっと恥ずかしい……。

「唉。卵はあんたに任せるよ」

隣にいた千秋がアタシに言つた。

「え？ なんで？」

チアキのほうがうまいじやん。

アタシはやりたくないなあ」

昨日、散々な結果だった『卵割り』はできればやりたくない。

「なに言つてんの。

練習あるのみでしょ？」

料理上手な人なら『片手』で割つむけやつんだからねー。」

「か、片手で？」

両手でやつてもうまく割れないアタシには、それはもう神の領域つてやつだ。

そんなのは『両手』とか言われる人の技であつて、アタシたち、一般ピーポーには関係ないつてやつなんじや？？

「多分先生も割れるんじやないかな？」

チアキはそう言つと、「先生つて卵片手で割れるんですか？」と質問した。

センセは黒板にレシピを書きながら「ああ、出来たナビ~。」と言つ。

や、匠がこんな近くにこむとは……、佐藤センセー恐るべし！

## 7・なぜかドキドキ！

「これ、おいしい~」

調理も終わり、アタシたちは今優雅にティータイムをしている。

クッキーはわくわくとしていて、とてもおいしい。

……アタシはセンセーに文字通り、付きっきりで特訓されてしまつた。

卵を割るのをかなり失敗したけど、最後には「ぱかっ」とうまく割れたりして

ちょっと、いや、かなり嬉しかったりする。

失敗したのはその卵割と、小麦粉をふるいに掛けるところ。

目の前が粉だらけになつたときは、本当にびっくりした。

そのほかは結構、自分でもびっくりするくらい順調で、取り立てて失敗は無かつた。

センセーって国語のセンセーやつてるより、料理のセンセーになつたほうがいいんじゃないかな？

最近ではイケメンの料理教室つてのも流行つてゐみたいだし。センセーきっと、女のヒトにモテモテするに違いない。

……どつかの主婦が、だらうけビビ（笑）

「先生つて上手なんですねえ。

料理教室とか開けばいいの?」

チアキはセイロンティーを飲みながら、呟つた。

やつぱりチアキもアタシと同じこと思つてたんだな。

アタシはナツツが入つてゐる一口サイズのクッキーをかじる。

香ばしい味がして、これなら何個でも食べれちゃうつー。

「んー。でも俺、国語の先生になるの供のところからの夢だつたしな。

料理は……まあ趣味だし。

定年になつてから『熟年男子のための料理教室』なんてのもいいかと思つてるんだけどな

センセーはちよつとトレながら答えた。

……こんな所も、きっと主婦にはたまらないんだろうな。アタシは『なんぢやつて主婦田線』でセンセー見てみる。

「定年つて……！ 一体幾つになつたときのことと言つてゐんですか～。

今がいいんですよ。今が！

イケメン料理研究家が流行つてるイメージが！

大体、こんなに料理が出来ない咲に、ちゃんとしたクッキーを作らせるなんて天才的ですつて！

私なんて、もっと凄いものを想像してどきどきしてたんですから！

「

おいおい。チアキちゃん。

なにげーに、酷い」と言つてしませんか？？

「こんなにおいしいなら、売るべきです。

いやー、売らなければならぬー！

クッキー詰め合わせとして、かわいい袋に詰めて……

材料費がこれくらい掛かるわけだから、人件費も考えて

チアキはアタシが反撃するまもなく、お金の世界へと羽ばたいて行ってしまった。

こういうところほんとがメツイなあ。

「ヤシヤニの赤金で、初めておしゃべりした時の作業室でした。

ほんとーにありがとう、アーリヤー

アタシは羽ばたいて行ったチアキをそのままにセンターにお礼を言つた。

「これならアタシの『素敵なお嫁さんになるぞ』の進行も早そうだ。」

「まあ、クッキーは簡単だからね。

材料の分量を間違わないよ」とは  
焼き加洞を僕を一回は詰た  
て上手に出来るよ。

それより 井上毛呂の書り方 上手はなに ただしや なしが  
元三は喜 ハジ。

最近成績も上がってるしな」

セシゼは、一歩一歩しながら、アタシの「」とを褒めてくれた。

褒めてもらいうのって、なんだかくすぐったい。

アタシはあんまり褒められたこと、ないからかもしれないけど。

そのせいかどうか分からぬいけど、かのひと胸があのつになつて、アタシはわざとビビりました。

## Hプロンとアタシの気持ち

その日の帰りに、アタシはチアキとショッピングセンターに行つた。

もちろんマイHプロンを買いに。

で、アタシは以外にふつーのHプロンって売つてないって」と、今更だけど気が付いた。

「ねえ。なんでこんな柄ばかりなのかな？」

アタシはエプロンを物色しながらチアキに聞く。

「Hプロンなんておばさんが使うものだからじゃない？  
ほら、これなんてステキ！」

なんか強そうだし、咲これにしなよ～」

適当に見ていたチアキは、にやりと笑うと度派手なピンクの豹が描かれているエプロンをアタシの目の前に出した。

「…………」

大阪のおばさんもビックリの、なんともいえない奇抜な「デザイン」！  
大体、豹がでっかく描かれているだけでびっくりなのに、  
それがショッキングピンクの色なのだ。

誰が着こなせるんだろう？ こんな凄いの。

「ねえ、チアキ。

エプロンってあと何処で売つてるんだっけ？」

今までエプロンなんてものに興味も無ければ関心も無かったので、  
アタシはショッピングセンターの衣料コーナー以外に売り場を知らなかつた。

「え？」

雑貨屋とかにあるんじゃない？」

「雑貨屋？」

「うん。

以外に種類豊富だし、ここにあるのより普通のデザインだよ  
チアキはそう言いながら、今度は螢光緑のパンダのデザインのエ  
プロンを手に取った。

「そ、そんなところがあるんだつたら、先に教えてよー！  
危なく妥協してアニマル的なおばさんエプロンを買つところだつた  
よー」

雑貨屋に行くと、確かにふつーのエプロンが置いてあった。

種類も結構あったので、アタシはとりあえず2枚買つことにした。  
ひとつはネイビーブルーのエプロンで、もうひとつはベージュの  
エプロン。

もちろん、ピンクでもないし、フリフリも付いてないシンプルな  
やつ。

……センサーはあの少女趣味なエプロンを見ても何も言わなかつ  
たけど、

何も言わないとそれはそれで恥ずかしい。

だって多分、アタシがフリフリエプロンが大好きだと思われてる  
んだろうし。

家に帰るなり、アタシはケータイのメールをチェックする。

メールボックスにアクセスしている間のちょっとした時間でさえ、

アタシにはじれつたくて仕方ない。

新着メールは有りません

無機質なケータイの画面を見て、アタシは短くため息をついた。

そしてそのまま、ベッドに仰向けに倒れこむ。

「やつぱり無し か 」

アタシはケータイをきゅっと胸に抱いた。

明日になれば、アツムの声が聞けると分かっているんだけど  
……  
そつなんだけど、やつぱり寂しい。

「声が聞きたいやつ……」

まるで壊れ物に触るかのように、アタシの胸から離した携帯のディスプレイ部分をそつと押した。

「」の前アツムから来たメールを表示して、読み返す。

『今週は現場の下見です。

不便なところなので、電波は届かないと思われます。  
木曜日には帰れると思います』

いつもながらの、短くて端的な文。

「 もつと普通のコトバが欲しいのにな」

アタシせこひにま居ない、アツムに向かつて小さく呟いた。

付き合つ頃よつも、付き合ひからのはうが寂しいのは、アタシ  
がアツムのことを

前より好きになつてゐからなのかな……。

でも、それでも……やつぱつとみじこ……。

毎日つて訳じやないけど

ちよつとだけでもいいから、アツムの声を聞きたい……。

触れることが無理なら、声だけでも聞きたいと思つのは欲張りな  
のかな？

会えないと分かつてゐけど、  
お仕事は大事だつて分かつてゐけど、  
アツムの近くに居たい。

## アヤ://ヒタタジ

昨日のクッキーは家族に（特に甘い物好きなおかーちゃんに）好評だった。

恥ずかしいHPロンのことは、ともかく置いておいて、アタシはちょっと部活が楽しくなりつつある。

だって、料理はほんとに駄目だったアタシなのに、ちゃんとしたおいしい食べ物が作れるんだもん。

やつぱり最初が肝心なのかもしれないって、アタシは思った。

「おはようチアキ！  
昨日のクッキーおいしかったねえ。  
今日は何作るのか聞いてる?  
うまく出来るといいな～」

アタシは教室に入るなり、チアキの姿を見つけて声を掛けた。

でも。

チアキはちょっと困ったような顔をアタシに向かっているだけ……。

な、何?  
どうしたの?

そう聞いとと思つた瞬間になぞは解けた。

チアキの向かいには、あの、倉沢綾実くらさわあやみが居たからだ。

綾実はアタシを見るなり、怖い顔で近寄ってきた。

能面みたいな、なんともいえない彼女の表情！  
ま、マジで怖いんですけど！

「あなた、先生に興味ないって言つてた割りに、  
なんで料理部に入つてんのよ！？」

あまりの剣幕にアタシはへなへなと座り込んでしまつた。

たぶんこれが俗に言つて『腰が抜けた』といつことなのかもしけな  
い。

……つて、そんなことまだいでもいいや。

とにかく綾実の気迫にアタシはたじたじだ。

アタシは「ちがうつて！」つて何度か言いかけたけど、  
綾実は聞く耳を持つてくれなくて、アタシの悲痛な叫びは彼女には  
届かなかつた。

結局そのときは、学校のチャイムでなんとかその場を離れる」と  
が出来た。

休み時間にチアキがアタシの弁明？ みたいなのをしてくれたお陰で、

綾実の怒りをなんとか静めることに成功。

でも、アタシはうつかり綾実に

「そんなに先生のこと好きなら、料理部に入ればいいじゃん？」

つて言つてしまつた。

## 言葉とアタシ

「出来れば、よかつたんだけどね……」

綾実は少し伏せ目がちになる。

チアキは小声で綾実がスポーツ推薦で入学したんだと教えてくれた。

あ……。

アタシ なんてコト言ひやつたんだろ？……。

いつも思つたことをすぐ言ひはじめて。

考えて喋ればいいのじつて、 そつ細つんだけど、  
アタシはいつも、 そつ。

「「」、「」めん……」

言ひてしまつた言葉は、もう消すことは出来ない。

ありきたりなコトバだけど、アタシは素直に綾実に謝つた。

そんなコトバしか出でないアタシは、やつぱり馬鹿だ。

なんだか恥ずかしくなつて、足元に視線を落とす。

「別にいいよ」

綾実の優しい声に、アタシは思わず顔を上げる。するとそこには、綾実の柔らかな微笑があった。

考えなしに言ってしまった言葉は、綾実の心に突き刺さったと思う。

でも、

綾実はアタシに微笑んでくれた。

綾実は、強いな……。

「ほんと、『めん』」

そういうと同時に、アタシは綾実に抱きついた。

ほんというと、綾実はアタシの苦手なタイプだ。運動会系特有の、ハキハキして、実直で、融通が利かないタイプ

でも、今はそんなところがかわいいなって思う。

「ちよちよちよつ！－！ な、なになに？？？－！」

きゅっと抱きしめてから数秒後。

綾実は急にじたばたし始めた。

「何つて？」

アタシは綾実から少し離れて、彼女の顔を見る。

アタシより頭ひとつ分背丈の大きい綾実を見つめると、彼女はな

ゼか顔を真っ赤にした。

「な、なんで抱きつく必要性があるのかなあ？？？」

綾実はアタシの肩を手で掴み、ぐつと後ろに押した。

「それは咲の習性だから。

まあ、一種の愛情表現つてやつ？」

ニヤニヤしながらチアキがなぜかアタシの解説を始める。

「つか、習性つて何よ～。

「せ、先生にはその『習性』しないでよね！

わ、分かつてる？

そ、それと、その……上田遣いも禁止だからねー。」

「センセーにはしないよ～

でも、上田遣いになるのは……アタシの背丈が高くなりなこと無理

アタシは綾実にきつぱりとそう言った。

そして、アタシたぬけむけの顔を見つめる

「ふつ  
「あははつ  
「はははは

アタシたち三人は、授業開始のチャイムが鳴るまで笑い続けた。

意外と、アタシたち、いい友達になれるかも知れない。

それってホント？！

もう日課と言つていいくらいの『図書館』トーク  
そろそろちゃんとしたテークをしたいんですけど、と思つたが、  
アツムにはなんとなく言えないでいる。

意外とアタシって意氣地なしなんだよね。

もし、嫌がられたら、とか思つちゃうと、前に進めなくなつちゃ  
う。  
それほどアツムのこと好きつことなんだろうな。

図書館に行つたら、でつかい張り紙があちこちに貼つてあつた。

来週は館内のメンテナンスのため臨時休館日とします

「ねえねえ。アツム。

来週どうする？ 図書館が臨時の休館日なんだつてつ

どこかに連れてつて～！ という意味を込めてアタシはアツムに  
言つた。

もし連れて行つてくれるんだつたら何処なんだろ？

遊園地？ 動物園？ 水族館？ 映画館？ ショッピング？？

大人の男の人が連れて行つてくれるといひつて全然想像付かなく

て、アタシはあついたりな場所を思い浮かべる。

でも。

そんなアタシのコトを知つてか知らずか。  
アツムはちよつと面倒くわかつに頭を撞いて「お前もつすべ試験  
あるだろー」と言った。

確かに。確かに有る。

再来週は試験ウイークだ。

でも、最近はアツムが勉強を見てくれるからちよつとせんせい感じ  
になつたと思うんだけど。

「ちよつとくらいい遊びたいよお~。

どうせ図書館が休みなら、勉強だつてできないし」

アタシはちよつと懶れてアツムを見た。

「来週は勉強」

静かな声がアタシに語りかける。  
まじめな顔をしているアツムもカツコイイな。  
アタシはどきどきしながら反論した。

「だつて、場所がないじゃん。  
勉強つてどこでするの??」

「俺の家」

「え??」

家つて？ それはアツムの住んでるところへ。

「あ、アタシ行つてもいいの？？」

アタシの心臓はもうどきどきを通り越してバクバクつていつてる。

「データが家だなんて…！」

それつてやっぱりぎゅーとか、ちゅーとか。

その後のことまで？？！ アリ？？！とか？？！！

「別にいいけど。

……勉強道具忘れるなよ

「う、うん…」

早く、早く来週の日曜日にならないかな？  
すっごく楽しみ！

## 月明かりの夜

嬉しそうで夜中に何度も目が覚める。

時計を見るとまだ朝の二時……。

まだ早いと思って、ベッドの中で何度も寝返りをうつねり、ぐうしても眠れない……。

アタシは起き上るとカーテンをそっとめくって、まだ暗い空を見る。

「……早く明るくなればいいのに……」

小さく呟いて、ふとため息をついた。

明日は日曜日、アツムに会つ日はいつも早起きをするアタシだけど、今日はいつもよりかなり早い時間だ。

それは、その、アツムの家に初めて行くからだ。

もしかしたら、あの、ちゅーとかぎゅーなんかもあつたりなんかして……。

そんなこと思つてたら、全然眠れなくなってしまったのだ。

仕方なくアタシは今日のお出かけに持つていく荷物をチェックする。

参考書と筆記用具、それとドリル。

勉強道具を忘れたら、ぜつたいアツムになにか言われちゃうから、これだけは絶対忘れないよつてしないとー！

それと、アタシが昨日家で頑張つて焼いたアップルパイ。

部活で作ったのがとつともおこしくて、アツムに食べさせたかったんだけど、その時丁度アツムは出張に行ってプレゼントできなかつたんだよね。

だから明日「いや」と思つて頑張つて作ったんだけど、ビリしてもパイ生地がうまく出来なくて。生地だけは冷凍のやつを使つちやつた。

りんごはサンセーが言つみつこ「紅玉」って種類を使つたから、かなり本格的な味になつた（と思つ）

アタシはアップルパイの入つた箱をそつと指で撫でた。  
「おいしそうで、言つてくれるかな？」

月明かりが優しくアタシを照らす。

静かな、静かな夜。

アタシはアツムのことを思い浮かべながら、もう一度ベッドの中に入る。

早く朝になりますように

到着？

「変なところ、ないかな？」

アタシは部屋にある鏡で、自分の服装をチェックする。

いまいちアツム好みの服がわかんないから、服を着るのもなかなかむずかしい。

ちょっとド供っぽいかな？ とか、地味すぎたかな？ とか。私服で会つときはいつも悩んでしまう。

今日は裾がフリルになつてるチュニックと、レギンスにしてみた。

チュニックはちょっと長めの丈だから、レギンスを合せなくても良かつたんだけど、なんか、その、ちょっとアタシから誘つてるとか思われても……だ

し。

でも、アツムが、その……したつて言つたら、せっぱりしちやうのかな……。

最初はすぐ痛いって聞いたことがあるから、なんかちょっと怖い。痛いのってすぐ苦手なんだよね……。

でも、断るのって……どうなんだろ。

そんなに好きじゃないって思われたりしちやうのかな……。

アタシは答えを見つけ出せないまま家を出た。

まあ、きっと、なんとなるでしょ。

なんて、思いながり。

アツムの家は学校と反対方向だった。  
アタシの家の最寄り駅のの次の次。

彼の話によると、駅を降りてすぐのマンションらしい。

アツムが書いてくれたメモを見て、目的地を目標す。  
紙には簡単な地図と住所が走り書きで書かれていた。

アタシはびっくりしながらアツムの言ひていた駅に着いた。  
アツムの地図通りに行くと……確かにあつた。ありました。

アツムの住んでいたマンション。

つか。

これ、一体何階あるの？ つてへりこのすぐ隣のマンション  
なんですか？

いや、マンションじゃなくて「オクション」つて書つてだつたかな？

アタシはびっくり眩暈を覚えた。

やういえばアツムつてお金持ちだつたんだっけ……。

アタシはなんだか別の意味でびっくりしながら「オクション」の  
扉を開けた。



勉強……しますか。

エントランスは大理石？ なのかな。  
やたらとゴージャスで、無意味に広い。  
まるでホテルのロビーみたいで、奥のほうには豪華な椅子やテーブルが何個がある。

「これ……だよね？」

アタシはアツムに聞いた部屋番号のボタンを押す。  
これが玄関のチャイムを鳴らすらしいけど……。

おかしいな。

アツム、もしかして寝てたりする？？

何度も押してみたけど、何の返事もない。

アタシはケータイを取り出すと、アツムに電話しようとした。

「あれ？ 着信？」

ケータイを見ると、着信を知らせるピンクの光が点滅している。

留守録1件

誰からの録音？ と思つてケータイを耳に当てるが、やいかにアツムの声が聞こえた。

『もしもし？ 味？ 急な仕事でこれから出かけなくなりやうけなく

なつた。

すぐ戻る予定だから、ちょっと待てるか?  
とりあえずまた電話する』

「え~~~~つ

な、なにそれ?!

アタシはボーゼンとしてケータイを見る。

……仕事……。

仕方ないってのは分かるけど、分かってるんだけど。  
やつぱり、寂しい。。

別な日ならともかく。  
なんで、今日なのよ。……。

アタシは仕方なくエントランスにある椅子に腰を下ろした。

よし。

こうなつたら向時間でも、アツムを待つてやうじやないの!

そうだ。

ついでに勉強とかしてたら、アツムが褒めてくれるかも知れない。

そう思つて勉強道具を取り出す。

このテーブルは以外に広いから、勉強もしやすそうだ。

ちらりと腕時計を見ると、時間は10時丁度を指していた。

早く、帰つてくると良いな

アタシは参考書を開きながらそつ思つていた。

## アップルパイと犬

勉強 と思つたものの、どうしても内容が頭に入つてこない。

アツムが早く帰つてこないかな、と思つて時計を見たり、連絡来てるかも？ なんてケータイを見たりしているアタシは完璧に上の空だった。

参考書を目で追つても、全く内容が頭に届かないなんて、アタシつてどれだけアツムのこと好きなんだろ？

もう一度腕時計を見ると11時10分をさしている。

あれから1時間近く経つたんだけど、まだアツムからの連絡はない。

アタシは参考書をぱたりと閉じて、イスから立ち上がった。ちょっと喉が渴いたので、外にある自販機で飲み物でも買おうと思つたからだ。

とられるほどの荷物はないので、アタシは財布とケータイを持つてちょっとだけ席を離れた。

「どれにしようかな？」

アタシはきれいに整列されている飲み物の見本をじっくりと見る。ロイヤルミルクティーと炭酸のレモン……ロイヤルミルクティーでいいが。

アタシはちょっとステキなお嬢様気分で、優雅にそのボタンを押す。

ガシヤンと音を立てて出てきた紅茶には、優雅にティータイムを決め込むお姫様の絵が描かれていた。

アタシはまたアツムを待とうと、オクションの中に入る。するとアタシが勉強のために陣取った席の辺りに、誰か居ることに気が付いた。

小太りの、ちょっと派出田なオバサンだ。シーズーかマルチーズみたいな白い小さな犬を抱きかかえている。

なんか、ちょっといやなんですけど……。

アタシはそんなことを思いながら、歩いていく。

広いエントランスではちよつと歩くだけでも足音がこれでもかといつほどに響いて、

当然その音に気が付いたオバサンはアタシの方を振り向いた。

「貴女、ここで何をやつてますの？」

オバサンは急にアタシに向かって口を開いた。

その声はピザとピザしくて、アタシはますます嫌な気分になつた。

「知り合いでが帰つてくるのを、待つていろといりです」

アタシは出来るだけ完結に言つた。

この手の『ザマス』的なオバサンはどつも苦手なのだ。出来ることならかかわりたくないし。

「知り合いで？ 本当に知り合いなんですか？」

もしそうであつても、こゝで待つてゐとこゝのは、いかがなものか  
と思いますけれども？」

オバサンはアタシをじろじろと上から下まで眺めてこゝの続けた。

「それに……こゝ言つてはなんですけど、貴女みたいな子の来ると  
こりじやありませんわ。

この場所を勉強する場所にされても……あれですしねえ」

オバサンはそう言つと腕の中の白い犬に向かつて「ねえ～メリル  
ちゃん？」とか言つてゐる。

やなヤツー！

「では待つている間に勉強するのはやめます。

どうせ暇つぶし程度でしたから。

それなら宜しいんでしょう？」

アタシはわざと笑顔を振りまきながらオバサンに言つた。

「こゝいう人には逆らわないほうがいいのだ。

えーと。こゝいうのを『触らぬ神に祟りなし』とかつてこゝん  
だつけかな？

アタシがそう言つて参考書をかばんに入れ始めると、オバサンは  
急に声を荒げた。

「貴女、私の言つてること全然分かつてらつしゃらないのね！  
もつと单刀直入に言つべきだつたかしら？

こゝは貴女のような庶民が来る様な場所じゃないのよー。  
早く荷物をまとめて出て行きなさい！」

オバサンのものすゞい剣幕に、その白い犬（メリルちゃんだっけ  
？）は驚き、

腕の中から飛び出ると、すゞい勢いでテーブルの上に置いてあるア  
タシの荷物めがけて突進してきた。

あつ！ アップルパイ！！

そう思つたときにはすでに遅く、アタシが昨日苦労して作ったア  
ップルパイの箱がぐしゃりと床に落ちた後だった。

「 うわ 」

運の悪いことに、箱の口が開いてしまい、アップルパイが半分以  
上床に付いてしまつていて。

「まあ～ メリルちゃん！

怪我はなくて？」

オバサンはアタシのアップルパイのことより、その犬のほうが大  
事らしくて、

その犬がしたことなんかまるで無視している。

「……なんてこと、するんですか……」

アタシはオバサンを睨んだ。

オバサンはちらりと床を見ると、はき捨てるよつていつぱつた。

「そんな不安定なところに置くからでしょ？」

こつちはメリルちゃんがその変なもののせいで怪我をするところだ  
ったのよ？」

なにそれ……

アタシが、悪いの？？？！

カツとなつて、おもわづ右手に力を込めたそのときだった。

「今日は長谷川さんはせがわが悪いですよ、彼女に謝つてください」

不意に後ろから男の人の声が聞こえて、アタシは思わず振りむく。

「さ、佐藤センセー？！」

アタシは驚いた。

だつてそこにはアタシの担任で、料理部顧問の佐藤翼さとうつばさ先生が立つていたから。

## アタシとセンセーとアタシ

アタシはぽかんと口を開けたまま佐藤センセーを見つめた。

「長谷川さん？」

センセーはオバサンに再度声を掛ける。

「わ、悪かったわね。  
佐藤さんの知り合いのお嬢さんだつたのは、最初に言つて欲しかつたわ……」

オバサンはそう言つて、そそくわざの場から逃げるよつて行つてしまつた。

後に残つたのは、無残なアップルパイと、間抜けなくらい口を開けているアタシ、それとセンセーだ。

「井上、とらあえずアップルパイを片付けよつか  
そう言つとセンセーはしゃがんで、ぐしゃぐしゃのアップルパイ  
を片付けてくれた。

アップルパイ。

アツムに食べさせよつか一生懸命作ったアップルパイ。

アタシは、なんだかすごく寂しくて、たまらなくなつて思わず涙  
が零れた。

涙つて不思議なもので、泣こいつと思つてないときに限つて後から後から溢れてくる。

「？ 井上？」

アップルパイを片付け終わった先生はアタシの方を振り返ると、泣いているアタシを見た。

やだ、恥ずかしい。

早く涙、止まつてよ。そう思つたときだつた。

センセーはぽんつとアタシ頭に手を載せて「上手に作れてたぞ？」

」と言ひながらぐりぐりと頭を撫でた。

声を出して泣きじやくつた。

「せ……せんせえ ！」

アタシは堪え切れなくなつて、センセーに抱きつくと、思い切り

\*\*\*\*\*

「大丈夫か？ 井上」

センセーはホットココアの入つたマグカップをアタシの前に出してくれた。

「ありがとう……」『やれこめや……』

アタシは白い湯気の立つココアをふつふつと冷ましながら一口へくと一口飲んだ。

甘くて、とろとろする温かいココアに、アタシは安堵する。

……ココアの入ったマグカップが空になるころ、アタシはなんだか落ち着かない気分になっていた。

「こ、センセーの部屋……なんだよね。

ヒントランスで一向に泣き止まないアタシを落ち着かせるために、センセーは自分の部屋に連れてきてくれたんだけど……いくらセンセーとはいえ、男の人の部屋に入っちゃうなんて、ちよつとまずいんじゃないのかな？？

ちらりとセンセーを見ると、彼は心配そうにアタシを見ていた。

じきり。

アタシの胸の鼓動は途端に早くなる。

センセーは学校でよく見るスーツ姿じゃない。  
黒のパンツにパークーといつらつな格好だ。  
もともと童顔なので、いつもよりも若く見える。

「それにしても　まさか井上だと思わなかつたから、びっくりしたぞ？」

センセーはさつまつとアタシの頭をぐりぐりと撫でた。

「誰か人を待つてたんだろ？　まさか俺か？！　なんてな　」

「うう言つてにかつと笑つセンセー。」

「多分落ち込んでいるアタシを笑わせようとか思つてるんだらうけ  
ど、

「そんな」と言われても笑えないと

「なんだか逆にどきどきしちゃいますからー。」

「あ、あの。すみませんでした。」

「あのオバサンに急に色々言われちゃって、なんだかテンパっちゃつ  
て……。」

「センセーにも迷惑かけちゃって……」

「アタシはびっくりを語りれないよつて、ちょっと田線を下に落と  
しながらお礼を言つた。」

「もう、大丈夫なので帰ります……」と言おつとした、まさにその  
ときだ。

「ぐ、ぐう～～～とアタシのおなかが鳴つた……。」

「、」のタイミングで？？！

「あ、あ、あ！　ありえないんですけどお？ー

「大きな音だつた。」

「絶対センセーに聞かれた……。」

アタシは耳まで真っ赤にしながら、ちらりと上目遣いで先生を見た。

## オムライスとケチャップ

「まあ、遠慮せずに食え」

アタシの皿の前にふわふわのオムライスが置かれる。

ケチャップの掛かったそれは、ふわりと皿に湯気を立てて、出来たてだよー」と自ら言つてゐるようだ。

「うわ～！ いい匂い……」

アタシは思わず皿を睨つてオムライスの優しい匂いをかいだ。

さつきおなかがなつた後、先生は「やうこいや、もう昼だったな」と言つてちらりと時計をみた。

そしておもむろに立ち上がると「とりあえず、腹が減つては戦は出来ぬつて言うし、飯にするか。井上」と言ひながら台所へと消えていった。

で、現在に至つてゐるわけで……。

アタシは今センセーと向かい合つて、センセーの手料理を食べる事になつてゐるのだ。

「いただきまーす」

アタシはちらりと綾実のことを思つたけど、この状況で食べないのは失礼に当たるわけで……、

綾実に悪いなと思しながら一口、スプーンですべりぱくつと食べ  
た。

「おこしこつ……」

ちゅうと半熟の卵が口の中に広がる。  
中のケチャップライスが卵との絶妙なコハドネーションをかもし  
出し、  
アタシはおもわず顔をほほえめる。

「お？ そんなこつまいか？」

沢山あるから、こつぱこ食べよ」

センセーが皿を組めてこじかにアタシのこじとを見ていた。

「こじ走様でした！  
モー、おなかいっぽこつ……」

せつきまでの悲しい気持ちがこじに吹き飛んでしまった。  
……おこしに食べ物を食べて満足しちゃうなんて、  
あたしつてかなり単純なのかもしね……。

食後、センセーの淹てくれた紅茶を飲んでこると、センセーが  
少しまじめな顔になつて言った。

「なあ、井上。

結局なんぞいのマンショーンのレストランに宿たんだ？」

「あ、それは　」

アタシは『カレシを待つてたんです』と言った。その後、はつとして口をつぐんだ。

仮にもセンセーにカレシの部屋に行くつて言つていいのかな？？？

「 知り合いの人に勉強を教えてもらひ約束があつたんです」

……ウソは言つてないと思つ。

多分。

センセーはちよつと怪訝な顔をしたけど、

「ああ、参考書も持つてたようだしな」と言つて紅茶を飲んだ。

## かみわまへつ

「 もうこえぱ、 センセー つてお金持ちだつたんですねえ」

アタシは「の重たい雰囲気をナントカしたくて、 わざと話題を変えた。

……もつ少し普通の話題でもよかつたのに、 アタシひばなんでもこんな変な話題振つちやつたんだり?

だつてほひ、 センセーがけよつと困つた顔をしてる……。

「 う、 うめんなさい! 」

アタシ、 いつも思つたことを、 すぐ口ひきかやつて……  
チアキにも『 もつ少し考えてから話しなさい』 って良く怒られてる  
んです!

だから、あの、その 今言つたこと、忘れてください

アタシは顔を真つ赤にしながら、 センセーに謝つた。

ああ。

なんでアタシって、 いつも考えなしなんだろ 。

「 そんなに謝らなくたつていこよ。

だいたい、 その素直さが井上のこことひでもあるしな

センセーはアタシの方を見て、 爽やかに言つた。

「 親戚がこのマンションのオーナーでね。

住んでるつこでこ、マンション内の見回りなんかするつて約束で格安で借りてるんだよ。

親戚は家賃は要らなつて言つてくれるんだけど、わすがに先生も社会人だしな。

つて訳で、残念なこと金持ぢやないんだなあ

わづぬつと、センセーはアタシの頭をぽんぽんと撫でる。

せ、センセーつて優しすぎや……。

ひたな優しきセンセーなら、わざと彼女さんとが、いるんだがつなあ。

ぽんやつとやつ思つたとわだつた。

パンポン

急にチャイムの音が聞こえた。

も、もしかして、先生の彼女さんの来訪??

アタシはびっくりする。

彼女さんが来たとき、先生の部屋にアタシが居たら まづくな  
い??!!

「せ、センセー。

アタシがここに居たら、まづくないですか??」

アタシはじめてセンサーに言ったけど、  
「べつに? なんで?」と、当の本人は全く気にしないみたい  
で、そのままインター ホンに出了。

「はいはい?

ああ。別に良いけど。

ロック解除するから、入って」

え、と。

アタシ、どうすればいいんでしょう??

が、カミサマ。

どうか。

どうか誤解で修羅場にはなりませんよ!」。

アタシはひとりあえず心の中で、カミサマに祈った。

「翼あー　俺はもうがっかりだよ」

急に扉が開いたかと思うと、長身の人気がセンセーに抱きつきながら言った。

「はあ？　今に始まつたことじやないだろ？」

センセーは何事もないように受け答えしてゐるけど……。

えーと。

アタシの目の前で、  
大の大人の男が二人。  
ぎゅーってハグしてゐるわけで……。

べ、別に人の趣味をとやかく言つつもりはない……けど。

その、ちょっと、驚いたつて言つた、なんていうか……。

アタシが目を丸くしてゐると、センセーは  
「うちの生徒がびっくりしてゐるじやないか」とちょっと嫌そくな顔  
で言った。

「生徒？」

その人はセンセーを離すと、アタシをつま先から頭のてっぺんまで見る。

「か、かわい～！」

なんだよ翼。

お前、こんなにかわいい彼女、いつの間につくったんだよ？

ああ。

だから昨日の合コンに来なかつたのか～。

それにしても、生徒なんだろ？

いいのか？ 先生が生徒に手を出しても……？」

「彼女じゃないって！」

センセーはアタシをちらりと見ると、ちょっと顔を赤らめて否定する。

んつと。

つまり。

センセーとこの男の人は、恋人同士じゃない……ってこと？

そつか。

アタシの……早とちりなのか。

アタシはニヤニヤと笑う男の人を見る。

センセーよりちょっと背が高くて、すっとした顔立ちをしている。

一言で言えば『美形』

さぞかしもてるんだろうなあ。

アタシがほんやりそんなことを考へていると、その美形がアタシ

の前にすつと立つた。

「お嬢さん。

翼の彼女じゃないんなら、俺と付き合いませんか？  
俺は翼の幼馴染の 川原 弓矢

お嬢さんのお名前は？」

優雅に挨拶をする彼 川原さんは、まるで王子様みたいなステキな笑顔だ。

フリーの女の子だつたらこの笑顔だけでメロメロになってしまつに違ひない。

けど。

アタシにはアツムつて言つ、すつごにカツコイイ（ちよつと意地悪だけど）カレシさんが居るのだ。

「あ、井上 咲です。

あの、その ごめんなさい」

アタシはペニンとその場で頭を下げる。

「えー？」

彼氏でも居るの？ 残念だなあ！」

河原さんはかなりオーバーアクションで残念を表現し、センセーはあきれた顔で彼を見ていた。

そしてアタシは帰路につく

河原さんはセンセーお手製の『オムライス』をがつこて食べて  
いる。

その食べっぷりはまさに豪快ー の一言。

王子様ががつがつと食べているをませ、なんと云つか  
だ。  
圧巻？

あのあと河原さんは急にセンセーの方に振り向いたかと思ひと、  
両肩をがしつと捕まえて「腹減った」と一言。

センセーはやれやれ、といった感じで「ちよつと待つて」  
と台所からふわふわオムライスを持ってきた。

センセーったら、おかわり有るとは云つてたけど、すでにつ  
くつてあつたとはー！

脱帽ですぞー！

「ふうー 食べた食べた

河原さんは紅茶を一口で飲み込むと、満足そうにおなかをたわむ。

……嗚呼。

何もしなければ『王子様』なのに。

行動が、言動が、実に残念なわけで。

でも、それでもついつい目が離せないってのは、やっぱり美形オーラのせいなのかな？

その時、アタシのケータイが鳴った。

ピンクのケータイを開けると、Eメール1件と表示されている。

嫌な予感がして見てみると、アツムからのメールで、

『ごめん

予想より時間が掛かりそうだ。

今日は無理だと思うので、帰ったほうがいい。  
夜、連絡する』

な、な、な―――つ―――！

なにそれ。なにそれ。なにそれ！

せつかくじきじきして、オクションまで来て、  
変なオバサンに色々言われて、なぜかセンサーに助けられて、  
……『ご飯まで食べさせてもらつちゃたけど、  
それもこれも全部アツムに会いたいからなのにい―――！

アタシはがつかり、がつくり、ぐつたりして、センサーの家のテ  
ーブルに突つ伏した。

「咲ちゃん？」

そんなアタシを河原さんが呼ぶ。

「あ、あはは……」

アタシは力なく笑いつと、センサーと河原さんに挨拶をする。

「用事が 用事がドタキャンになっちゃつたんで、アタシ、帰ります。

あの、センサー。

さつきは助けてくださいありがとうございました……

オムライス。すくおこしかったです」

ペーっと頭を下げたアタシにセンサーは「戻をつけて帰れよ? と戻を使ってくれ、

河原さんは「もひと咲ちゃんと話したかつたなあ」と残念そうに言ったてくれた。

アタシは、仕方なく。  
仕方なく、家に帰ることにした。

朝に見た見知らぬ風景は、あんなにもきらきらと輝いて見えていたのに、  
帰りの景色は、何処となくすんでいて、アタシは思わずため息をつく。

アツムの……ばか……。

## 切ない時間

その日、アツムからの電話もメールもなかった。

アタシは何もやる気がおきなくて、ベッドに腰を下ろしながら、ぼんやりとテレビを見ている。

見ているといつても、ただ画像が目に映っているだけで、番組の内容なんて、全然頭に入っていない。

この前アツムの家に行くなつて話が出てから、アタシはどこか浮かれてた。

アツムはアタシと違つて、社会人なんだから仕事が大切つてのも、分かつてゐつもりだつた。

でも 本当に『つもり』だつたつて、思い知らされた……。

『私と仕事、どっちが大事なの?』つて言つ女の人の話をよく聞いたりする。

今までのアタシだつたら、そんなの仕事に決まつてるジャンつて思つてた。

だつて、何をするにもお金は必要だし。仕事してなかつたら、収入ないし。

将来にだつて希望のきの字も見つからないつて思つてたから。

でも、今はそういう女の人の気持ちがちよつと分かる。

『どっちが大事なの？』の言葉の裏には『私のこと、愛してる？』って言葉が隠れてるんだ。

面と向かって聞けないほど相手のことが好きなんて、かなり言田の愛なのかも。

でも、男の人は言葉通りに捕らえちゃうから、言葉も気持ちもすれ違っちゃう……。

切ないな。

アタシは付き合いつつもつと楽しいことだと思つてたけど、恋愛は切なくて、苦しくて、辛いこともあるんだつて気が付いた。

ねえ、アツム。

アツムはアタシのこと、どれくらい好きなのかな？

鳴らないケータイに問いかけても、答えなんて見つかるはずもない。

アタシはそのままベッドに仰向けになつて倒れこむ。

白い天井がぼんやりと滲んで、アタシは静かに涙を流した。

## 会いたいキモチ

アタシはケータイの着信音で田を覚ました。  
あ、アタシいつの間にか寝ちゃってたんだ……。

体を起こしてケータイを見ると アツムから電話

「あ、アツム ？」

ちよっと、ほんのちよっとだけ、声がかされた。

『咲？ 電話するつて言ったのに、悪いな』

アツムの声が、アタシの体にしみこんで来る。

その声が、とても優しくて、アタシは思わずぞきつとした。

「ううん。お仕事だつたんでしょう？  
忙しいのに電話してくれてありがとう。  
声が聞けただけでも、嬉しいよ」

『 声がいつもと違つけど、寝てたのか？

本当はもう少し早く電話するつもりだったんだけど、  
以外に時間掛かってしまって。

日付も変わったから、メールにしようかとも思つたんだけど、  
俺も咲の声聞きたかったしな

アツムはいつもよつよつと寝てたけど、

それって照れ隠し……なんだよね？

「ねえ、アツム？

アタシのこと、好き？」

電話口のアツムはけよつと間を置いてから、わきよつもつとぶきりほひに「ああ」とだけ言ってくれた。

アタシは嬉しくて、恥ずかしくて、くすぐったくて。ちょっと涙が出てうになつた。

『明日は時間あるから、いつものところで待ち合わせな。

あと、ドリル。

忘れんなよ？

じゃあお休み。子供は早く寝なさい』

もう言つとアツムからの電話は切れた。

たつた三分くらいの電話だつたけど、アタシはすごく嬉しくて、やっぱりアタシはアツムのことが大好きだつて再確認した。

また考えなしに言つちやつたけど、今回はいいよね？  
だつて……アツムのキモチがちゃんと聞けたんだし。

アタシはケータイを胸にぎゅつて抱いたまま布団に入った。

嬉しくて、どきどきして、なんだか眠れないけど、はやく明日になつてアツムに会いたかったから。



## 昨日のハナシ

「おはよう」

後ひから声を掛けられて、振り向くとそこにはチアキがいた。

「おはよー」

アタシは下駄箱から上靴を取り出しながら言つ。

チアキはアタシの顔を覗き込んで言つた。

「ん？ なに？」

寝不足？ やはりと田の下へ元気が出来てるけど？

「え？ ホント？」

アタシは田の下の所を指でこする。

「またカレシの電話でも待つてたの？」

「やうじやないけど……。

早く朝にならないかなーって思つてたら、寝れなくて……」

「なるほどー。

じゃあ、今日もデートなんだ

「え？！ なんで分かるの？？」

アタシが驚いていると、チアキはアタシのおでこを指で押しながら「咲が夜更かしするのって、対外カレシがらみだしー」と言つた。

た、確かに。

否定は……出来ないけど。

アタシは押されたおでこを手で押さえながら、チアキを睨んだ。でも、チアキはそんなの気にする様子もなく、そのまま教室へと歩き始める。

「あ、そーだ」

急に振り向くと、チアキは一言  
「寝ぼけてセンサーに抱きつかなによい!」とアタシに注意する。

「……」

そ、そんなことしないって……」

アタシは昨日センサーに抱きつっちゃったことを思って、今さらだけど恥ずかしに顔を赤くした。

「ねえ、綾実は?」

アタシは教室を見渡しながらチアキに聞いた。

彼女は毎日朝練があつて、この時間などいつも教室に居るのです。なのに、今日はなぜかその姿が見あたらなかつた。

「あれ？ そういえば居ないね。  
… かばんもないみたいだし。  
今日休みなのかな？」

チアキは少し首をかしげながら囁く。

休み？

「綾実に言つたのになあ

『せつりと独り言を囁くと、チアキは困る』「なに向？」と身を乗り出しつて聞いてきた。

「え？

あー、えーっと。  
そんなに『す』ことじやないんだけど、  
一応言つておかないとなーつて思つて。  
こじれたりすると、ちょっとめんどい

「こじれるつてことは、先生がらみの」と？  
こじれる前にとりあえず、このチアキちゃんに言つたなー。」

「そんな田を輝かせなくともいいつて。  
たいした話じやないし。  
んーっと。

昨日、アタシ、カレシの家に行くことになつてね

「

「はあ？！」

「なにそれ！！」

「聞いてないし！！」

チアキはとたんにむすっとした顔になつた。

「後で報告しようと思つてたんだつてば。  
大体最初に言つと、チアキつてば事あるまい」とニヤニヤしてそうだし

し

「う……

確かにそれは否定できない、かも。  
まあいいや。

で？

「彼氏の家に行つてそれから？？」

「カレシのマンションのエントランスまで行つたんだけど、急に仕事が入つて会社に行つちゃつてで。  
で、仕方なくエントランスで待つてたの。  
そしたら犬を抱いた変なおばさんに絡まれちゃつて。  
困つてたらそこに佐藤センセーが偶然現れて」

「はあ？？」

「助けてもらつて、ついでにセンセーの家でお昼をこ馳走になつて。  
そうして『元気だ』、カレシからメールで『仕事が長引くから帰れ  
つて言われて。』

で、家に帰つたの」

昨日のことと簡単に搔い捨てで説明してみたけど、  
チアキは口をぽかんと開けたまま固まっていた。

「チアキ？ どうしたの？」

「……ど、どうしてそんなぐーゼンが？？！  
しかもなんで先生の家でお皿を！」馳走してもらつてんのよ。」

そう言つてチアキは眉間にしわを寄せた。

「でも確かに。  
綾実にちやんと言つておかないと、これは  
間違いなくこじれる  
ね」

アタシたちは顔を見合わせて、深くため息をついた。

## つまらないかない日

センセーが出席簿を持つて教室に入ってきたけど、綾実の姿はまだない。

「今日、倉沢は風邪で休みだ。

みんなも体調管理には気をつかるよう

「

そうセンセーが言って、今日は綾実が学校に来ないのを知った。アタシはなんとなく申し訳なく思う。

何がって訳じやないけど、なんとなく抜け駆けみたいな。  
……そんな感じになってしまってるから。

メールや電話をすればいいと思つたけど、あたしつてばアシムのことばかり考えていたせいで、うつかり綾実の連絡先を聞いてなかつたことに今更気が付く。

アタシってなんでこう、抜けてるんだろ。

その日はなんだか何もする気になれない。

その上、部活では失敗して、せっかくのお料理を黒焦げにしてしまった。

あんなに楽しみだつたアシムとのデートも、なんとなく気が重く感じる。

アタシはアツムとの待ち合わせの店で、やつくりと紅茶を一口飲む。

なぜか今日は、紅茶の優しい味がしなくて、代わりに口の中に熱い感覚だけが広がった。

## アタシヒマシムとお仕事

「咲？」

不意に名前を呼ばれて、アタシは顔を上げる。

そこにはアタシのカレシ アツムの心配そうな顔があった。

「え？ あ、」めん。

なんかぼーっとしてた……

アタシはそのままと、カバンからドリルを出してアツムに渡す。

「アタシ、結構頑張ったんだよ？」

アツムはドリルをペラペラとめくって「よく頑張ったな」とアタシの頭を撫でた。

この瞬間が、アタシはかなり好きで。  
アツムの笑顔も大好きで。

アタシはこの時の為に勉強を頑張つてること言つても過言じゃないのだ。

撫でていた手がアタシのおでこに触れる。

「熱はないみたいだな？」

熱？

もし顔が赤いなら、それはアツムにどうぞしてるからだよ？  
そう言おうと思つたけど、さすがにそれはちょっと恥ずかしいな。  
そんなことを考えていると、アツムはさよつと心配そうな顔をして、「うう」と言つた。

「咲の顔色悪いから、今日はもう帰るわ」

「え？！」

アタシは思わず素つ頓狂な声を上げた。

「な、なんで？  
今あつたばつかりなのに？！」

反論してみたものの、アツムには敵わなかつた。

次のデートの約束は取り付けたものの、アタシは半ば強引に家に  
帰るよつと言われた。

「心配だから家まで送るよ」

アツムはさう言つたけど、途中で仕事の電話が掛かってきて、会  
社に戻らなければいけなくなつた。

「アタシ、別に具合悪くないから。  
大丈夫だから、お仕事行って来て？」

社会人はお仕事頑張らないと… でしょ？」

アタシを家まで送り届けてから行つても間に合ひとアツムは言つてたけど、アタシは丁寧にお断りをした。

アタシのせいでアツムに迷惑掛けたくないし。

「家に着いたら、メールしろよ。」

それと、暖かくして早く寝るよつて…。」

アツムはアタシの頭をぽんと撫でて「ありがとな」って呟いた。

小さくなつていくアツムの後姿を見送つて、アタシは家に帰ることにした。

ホームに着くと、なんだか足が重い。

今日は特に運動したわけでもないのに、足がだるくて仕方がない。

アタシはホームにあるベンチに腰を下ろした。

「井上？」

急に肩を掴まれて、名前を呼ばれた。

「大丈夫か？ 井上」

アタシは重たいまぶたを何とか開けて、その声の主を見る。

「せ、せんせ？」

そこには心配そうな顔をした佐藤センセーの顔があつた。アタシはセンセーの顔をぼんやり眺める。

するとセンセーの手がふわりとアタシのおでこに触れた。ひんやりとした感覚がとても気持ちよくて、アタシは思わず目を瞑る。

「 井上、立てるか？ いくぞ？」

センセーの声が、なんだかとても遠くから聞こえてくる。その声に答えるようとしたけど、体の奥からじわじわと睡魔が襲ってきて

アタシは再びまどろみの中に溶けていった。

ふと気が付くと、そこは白い空間だった。

アタシの右手には管が付いていて、その先には点滴のパックが付いている。

「点滴……」

アタシは体を起しそうとしたけど、なんだかうまく力が入らない。  
ナニコレ?  
どうこいつ」と…?

「気が付いたか? 気分はどうだ?」

点滴にばかり気をとられていたから気が付かなかつたけど、  
アタシの左側になぜか佐藤センサーが居た。

「え?

あれ??

アタシ ? 「

アタシが戸惑つていると、センサーは説明をしてくれた。  
それによると、アタシはホームにあるベンチでぐつたりとしていたらしい。

その時センサーがアタシを見つけて、病院まで運んでくれて  
で、今に至るんだそうだ。

「井上の家には連絡入れておいたから、とりあえず点滴が終わるまで寝ていいぞ。

あと一時間くらい掛かるらしいからな

「井上の家には連絡入れておいたから、とりあえず点滴が終わるまで寝ていいぞ。  
あと一時間くらい掛かるらしいからな

「うん、だいぶよくなつたな」と言つて笑つた。

## カンチガイの夜

「唉、大丈夫？」

おかーさんの声がした。

「うつすらと目を開けると、おかーさんの心配そつな顔。わざわざ来ててくれたんだ……。

「大丈夫。……ちょっとだるかつただけだし。点滴したらかなり良くなつたし」

「そう？ あまり無理はしないでね」

おかーさんになんだか心配かけちゃつたな。

そう思つてゐるとおかーさんはセンセーにお礼を言つてゐる。

あ、そうだ。  
アタシもお礼言わないとだつた。

センセーに色々迷惑かけてたのに、御礼の言葉一つも言つてなかつたアタシ。

具合悪かつたとはいえ、それはないよね。

「あのつ。センセー。

色々迷惑かけてしまつて、ほんとすみませんでした」

アタシがそつと、センセーは「井上は俺の生徒なんだから、

そんなこと気にしなくて良いんだぞ？」と軽く言った。  
爽やかな笑顔のオマケつきで。

アタシはなんだか心地いい感じで、思わず田を逸らした。

逸らした田線の先には　ちょうどおかーさんがいる……ってか、  
ち、違うからね？　おかーさん！  
センセーが好きとか、そんなんじゃなくて　。

アタシの顔がよっぽど言い訳じみていたのかなんなのか。  
おかーさんはものすこじく含みのある笑顔を見せると、センセーに  
分からぬいように口パクで  
『大丈夫。秘密にするから』だつて……。

な、何を秘密にするのよ？！  
ちよつと！　ほんとに違うんだってバ――！

点滴も終わって、家に帰るときわざわざセンセーはアタシのつち  
まで送ってくれた。

アタシが途中で倒れたりしたらまことにだらうとおこしてきててくれた  
訳なんだけど……  
おかーさん……めちゃ勘違こしちゃって、やたらとこやこしちゃ  
つてるし。

ほんと違うから。  
アタシが好きなのはアツムなんだから～つー。  
なんかもう、勘弁してください……！

「咲姉、やっぱ風邪なの？「うつむな」でよね

家に入るなり妹の美季から言われた言葉がコレだ。  
も～！ ほんと可愛くないんだから～！

「ほりほり。お姉ちゃんは本当に真面目いんだからそんなこと言わ  
ないの～。」

「……はーい」

美季はおかーさんに適切な返事をして、一階に上がりしていく。

「全く。素直じゃないんだから……。

先生から連絡があったとき、電話に出たのが美季だったんだけどね、  
すつじぐく心配してたのよ」

おかーさんはそういうながらアタシをとつあえずロビングのソフ  
ターに座らせてくれた。

美季が心配？？ ほんとかなあ？？ 面の美季なら心配してくれ  
たろうけど。  
今はなんていうか、生意氣で自分勝手だし……。

「何か食べられそう？ おかゆとか……ヨーグルトあたりなら大丈  
夫かしら？」

やつまつとおかーさんは「一口でも良じから食べてね」とおかゆ  
とヨーグルトをテーブルに並べた。

頑張つてみよ。」

おかゆをスプーンでくつて、ぱくつと食べてみる。

「食べれそう……ありがとな、おかーさん」

塩味が一度良くて、アタシはいつもながらもおかゆを完食した。

「おこしかつたよ。」

アタシはやつぱり、おかーさんが用意してくれたパジャマに着替える。

「おかゆ、美季がつくれたのよ」

「えっ！ おかーさんが作ってくれたんじゃないの？！」

おかーさんの言葉にびっくりして、アタシは先ほどまでおかゆが入っていた小さな土鍋を見た。

「お母さんは咲を迎えて行くことになつたから時間なくてね、そしたら美季が『私が作つてあげる。咲姉おなか減つてるかもしないし』だつて」

おかーさんはふふっと笑つてから「あの子、いつも意地張つてゐけど、お姉ちゃんのこと大好きなのよ」と言った。

「そ、そつなの……かなあ？？」

なんか良く分かんない。

反抗期つてやつなのかな？？ だから素直じゃないの？

ほんやつやんなことを勧えてみたけど、やっぱり良くなかった。

アタシは処方された薬を飲んでベッドに入る。

横になるとわざとまではなんともなかつたのに急に眠気が襲つてきて、アタシはアツムにメールを出来なこまま眠つてしまつた。

## 熱とスポーツリンク

ほんやつとアタシは田を開ける。カーテン越しに見える陽はすでに高く、不思議に思いつつ壁にかけてある時計を見る。

10時35分

アタシは驚いて飛び起きた 気持ちは。

でも心とは裏腹に、アタシはベッドの中で小さく動いただけだ。

な、なんで？？

驚いていると、一度アタシの部屋のドアが開いた。

「唉。起きたのね。びりー、調子は？」

おかーさんは手にしておいたおぼんをアタシの机に置くと、スポーツリンクの入ったグラスを差し出す。

……あ、やつか。

アタシ昨日ひどい風邪を引いたんだった。

寝起きでほんやつする頭をむりやりフル回転せせる。

「ん あんまよくな。ちょっと、起こして……」

アタシはおかーさんに体を起しつつも、スポーツドリンクを一口飲んだ。

風邪を引いたらとつあえずスポーツドリンクで水分補給するのがうちのシキタリ？ だ。

なんか、ただ水を飲むのよりいいいらしにって事は知ってるけど、何がいいのかはちょっとわかんない。

意外と喉が渇いていたみたいで、アタシはそれを飲み干す。

なんとなくだけど、少し体の調子がよくなつた気がした。

「おかゆ。食べれるかしら？」

おかーさんはそう言いながらアタシにおかゆの入ったお茶碗を手渡す。

ふわりと湯気が揺れて、アタシのおでこに触れた。

「多分大丈夫。 いただきます」

アタシはそつそつとスプーンでおかゆをくつて食べる。

病気になると必ずおかーさんは「梅がゆ」を作ってくれる。これはアタシも大好きで、熱があるときでもなんかせっぱりして食べやすいのだ。

「じゃあ、今日はゆっくり休むのよ？」

おかーさんは起きぱきと窓のお茶碗と薬が入っていた袋を片付け

るヒタタシの部屋を後にした。

アタシは布団に包まりながら、何気なくケータイを手に取る。

メールが……2件……

あ……

しまった……

アタシ、アツムにメールするのすっかり忘れてた！

お、怒ってるかなあ??

アタシはちょっと泣きそうになりながらメールを開いた。

お姫様抱っこ!??

「……」

アタシはケータイのディスプレイを見つめる。

絶対、絶対アツムからのメールだと……そう思つてたのに……。

「一件ともチアキから……か……」

風邪大丈夫?つていうのが一件目。

で、一件目は はいっ?!

なんだこれ?

アタシは目を擦つてから、もう一度チアキのメールを端から端まで丁寧に読む。

『咲が先生にお姫様抱っこされてたってうわさが流れてるんだけど?  
どういうこと? 彼氏とデートじゃなかつたの?  
とにかくそれを見たつて言う子が結構居てクラス中大騒ぎだよ?!  
ほんとなの?????』

「どうじゅう」と? と聞かれたけど、アタシだつてわかんないよ?!

えつと、どうこうことなの？？？？

アタシの思考は停止寸前だ。

意味が……解らないんですけど。

アタシはチアキに電話をした。

今の時間なら、なんとか休み時間のはずだ。

「もしもし？ 咲？

あんた、何やってんのよーーー！」

聞こえてきたのはホール音ではなくチアキの怒鳴り声だった。

「チ、チアキ……

電話出るの早いね

」

「当たり前よ！ だつていつ咲から電話が掛かってきてこいこうつに、すたんぱつてたんだもん！」

電話の向こうのチアキはちゅうと得意そうな声を出してくる。

「で、どうこうことなの？ 咲」

「それば……アタシが聞きたいくらいなんだけど

」

チアキはため息をつくと、「ちやんと顔を追つて話しながら」とアタシに言った。

「

## 嘘みたいな偶然

「じゃあ、もう一度聞くけど、アツムさんと別れてから駅のベンチでぐつたりしていたところ偶然先生に会って、病院まで連れて行つてもらつた……つてことなのね？  
しかも気が付いたら病院だつた、と……」

「う、うん」

電話の向こうでチアキのおつきなため息が響いた。

「全く！ なんでそつなるかなあ！  
大体アツムさんは咲が具合悪いって分かつてたんでしょう！  
なのになんで彼女を放つて置くかなあ！！」

「い、いめん」

あまりの剣幕にアタシは思わず謝る。

「なんで咲が謝るのよ！ 家まで送るくらいしてくれても良いもん  
でしょ！？」

「ん、でも、アタシが一人で大丈夫つて言つたし。  
……もともとその時点ではアタシ全然元気だつたし……」

アタシはしどろもどろになつてチアキに弁明する

そう。

アツムは『家まで送る』って言つてくれたのだ。

断つたのは アタシ。

だからチアキの怒りはアツムじゃなくてアタシに向いて当然なの  
だけど

大親友のチアキは「そつなの？！」といいつつもまだ納得して  
いないようだつた。

「だから先生は病院に連れて行ってくれただけなの。

もしチアキが何か聞かれたらそつ言つておいてくれないかな？」

「まあ いいけど……。

あ、チャイム鳴つたから切るね。

とつあえず、安静にしてるようだ！

よほど慌てていたのか、チアキはアタシの返事を聞く前に電話を  
切つてしまつた。

先生にケータイが見つかつたら没収されちゃうもんね。

焦つて授業の準備をするチアキが想像できて、アタシはくすりと  
笑つた。

すると突然アタシのケータイがぶるぶると体を震わせる。

「……」

見るとそれは大好きな彼 アツムからのメールだつた。

## メールとカレシ

『体調大丈夫ですか？』

簡素なメールだけ、アタシはおもわず顔が赤くなる。  
大体いつもメールをくれるのは夜とかな訳で、こんな田中仕事してると時間が思うにメールくれることなんて今まで無かつたから。

アタシのことを気にしてくれてるんだと思うだけで、アタシの心臓は飛び出しそうなうらこじわざと踊っている。

『昨日メールできなくござりめんなさい。

あの後体調が悪くなつて病院に行きました。

風邪だそうです。

アツムに移つてないかとちょっと心配してます。

お仕事、頑張つてください』

本当はもつともつと伝えたいことがあつたんだけど、なんて返して良いのか分からなくなつてこんなメールを送つた。

……。

アタシはもう一度メールを打つ。  
そしてケータイのディスプレイを見つめた。

『早くアツムに会いたいです』

送信しても　いいかな?  
仕事中だと迷惑かな?

いいや!  
送信しちゃえ!!

アタシは目を瞑つて送信ボタンをぎゅっと押した。

その直後アツムからのメールが来て、やっぱり簡素だったんだけ  
ど。

『俺も

この一言にアタシは嬉しくて恥ずかしくて、おもわず布団を頭から被りケータイを抱きしめた。

## とある昼休みに

「咲つてかなりの天然？  
でもいいなあ）。私も先生にお姫様抱っこされたかったよお」

綾実がぱくりとレタスチーズサンド食べながら言つ。

「でも、覚えてないし。

それにおかーさんに変に誤解されてたいへんだったんだからやー」

そう言いながらぱくつと私が食べたのは///ハンバーグ。  
某ネズミのキャラのかたちだ。

最近おかーさんは『キャラ弁』なるものにはまつていろいろしい。  
かわいいんだけど、食べ辛いのが欠点かな？

アレから一日後。アタシはすっかり元気になつた。  
今は丁度お昼休みなのだ。

「つてか、私に感謝しなさいよ～？

みんなの誤解解くの大変だつたんだからわあ」

チアキはから揚げを箸で刺しながらウインクをした。

「チアキ。あんた行儀悪いわね。  
それは刺し箸つて言つて……」

綾実は意外と礼儀作法に厳しい。

アタシは綾実とチアキの掛け合いで思わず微笑む。

最近は三人でお弁当を食べるのが日課になっている。

「あ、そうだ」  
チアキはそのままカバンから一枚の紙を取り出し、アタシの手の前に出した。

「？ なに？」

「文化祭のアンケート。

今日締め切りだからよろしく」

「文化祭……来月なんだ」

全然忘れてたよ。しかもチアキが文化祭実行委員だったのね。  
プリントの右上にチアキの名前が代表として載っている。

「ちなみに部活は『喫茶店』の予定だから」

「へえ～ 喫茶店……。

じゃあやつばクラスの出し物はこれかな？」

アタシはシャープペンを取ると『おばけやしも』と書いてチアキに渡す。

「なんつーか、オーソドックス?  
私は展示会つて書いたよ。  
一番楽でしょ。ああいつのつて」

チアキはそのままカバンの中に入しまつ

た。

## 天然とパフォとカラオケ

アツムとの勉強のお陰で、今回のテストワークはかなりいい感じだった。

いつもは赤点なんじゃないかとひやひやしてたんだけど、今回はかなり自信がアル。

「ねえチアキー。帰りにどつか寄つてかない？」

アタシが声をかけるとチアキはなんかいつ含みのある笑いをした。

「へえ～。なんか余裕だねえ。

いつもならさ、テスト終わった当田つて『もつ駄目ー。家帰つて寝るからー』って言つてるのに。

やっぱあれ？

アツムさん効果？？ 恋する乙女つてやっぱ違つねねー

「つづつ。

間違つてはないけどねー。

なんかいつ、言葉ではつきつ言われちやうと恥ずかしつつ

「つてか、その。  
いつも勉強見てもひつてるからだよ」

「やうねー。

咲は『やれば出来る子』なんだからねー

……反論すればするほど、なぜかじつほにほまつてこくぶつな飯  
がする……。

「綾実！ チアキがいじめるよー」

アタシは一度近くを歩いていた綾実に抱きついて助けを求めた。

「ちょっと！ 急にはびっくりするつて！

それにチアキもチアキだよ？

天然でぼんやりな咲をからかっちゃダメでしょーが

……天然でぼんやり？

助けてもらつたのは嬉しいけど、ちょっといただけない台詞、いや  
ない？？

ちょっと言葉が引っかかるけど、まあいいや。

「綾実も一緒に行こうよ。ね？ パフュとカラオケに！」と綾実  
を抱きしめたまま言った。

綾実はちょっと恥ずかしそうな顔をして「ほんと咲つて天然だよ  
ね」と呟いた。

## カラオケとイケメン王子

駅の近くにあるカラオケ屋さん。

そこはアタシの希望通りの店なのだ。

その店はカラオケ屋さんと喫茶店のオーナーが一緒にみたいで、カラオケをしながら喫茶店の看板メニューである『パフェ』が頼めちゃうのです！

単なるカラオケ屋さんのパフェとはホントに全然違うからアタシはカラオケに行くならこのお店って決めている。

「私カラオケって久々かも」

綾実はカラオケの部屋をくるりと見渡して言つ。

「綾実は部活の鬼だしね」

チアキは曲の選択をしながら相槌を打つ。

アタシはとくとおいしそうに並んだパフェの写真を見ながら、どの子にしようかなーなんて考えていた。

三時間ほど歌いまくつて、アタシたちはカラオケ屋さんを後にした。

「あー歌いまくつて喉痛い！」

「チアキ歌うまかったねえ。びっくり！」

「綾実も上手だつたよ。今度チアキと二人でバンド組んでよ。そしたらアタシ見に行つちゃうから」

「楽器出来なのにバンド??」

「それ変だつて〜！」

そんなんくだらない」と話をしていたら、綾実が急に立ち止まって言つた。

「ねえ、あそこにいる人。  
ちょっとかっこよくない??」

「え?  
どこ??」

アタシたちが分からずにつきよろきよろしていると、綾実は「ほら、あそここの背の高い人だよ」とじれつたそつに言つた。

ああ、あのスーツの人。

やつと分かつたんだけど、なんか見たことあるような気がする…  
…。

その人はアタシに気が付いたみたいで、爽やかにこっちはに向かつて歩いてきた。

つて　こんな感じで会うなんて思つてみなかつたんですけど  
?!?

スーツなんか着ちゃつてるとこ見ると、以外にフツーのワーマンだったのかな??

「咲ちゃん久しぶり!　テスト今日までだつたんだよね?　お疲れ様~」

ちょっと軽そうに挨拶してくれた王子様。  
アタシのこと覚えてくれてたんですね。

「か、川原さん。お久しぶりです」

こんなところで会うとは思わなかつたので、アタシはびっくりし  
た。

## スーシの王子様

「名前覚えてくれてたんだ！ うれしいなあ」

「川原さん！」と笑う川原さん。

少女漫画なんかだと、いつもピンクの背景に真っ赤なバラなんかが飛んでるんだろうな、とうつかり思つてしまつくらいの王子様ぶりはスーツを着ていっても相変わらずだ。

「川原さん！」

あ、この二人はアタシの友達のチアキと綾実です

王子様オーラにやられてる一人を紹介すると、川原さんは「川原さん」と笑つて「よろしく！」と挨拶をした。

きらきらの笑顔にチアキと綾実は顔を真つ赤にして、見せた。

「つづかりすると頭から湯気が出そうな感じに思わずアタシは噴出しそうになるのをこらえる。

「今日は仕事なんですか？」

「ん？ そうだよ。

社長が茶菓子買って来いつて言つから。  
今その帰りなんだー」

そう言つと彼は手に持つてゐる紙袋をちらりと見る。  
紙袋には洋菓子店の名前がかわいく印刷されていた。

「あ、セレの店有名なんですよね？」

この前テレビの特集で見ましたよ！」

チーズタルトがすごく人気で、すぐ売り切れちゃうとか

「やうらしいねえ。

あ、じゃあコレあげるよ

川原さんはやううとあたし達に可愛らしくラッピングされたチーズタルトを手渡した。

「え？ いいんですか？！」

「いいのいいの。

その他も色々買つてあるから。

じゃあ俺そろそろ戻らないといけないから。

またねー」

川原さんはやううと爽やかに去つて行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5103p/>

---

おばかなアタシと年上カレシ 2

2011年9月18日13時22分発行